

ごあいさつ

主の皆を賛美いたします。クリスマスが近づいてきました。主の恵みと希望を待ち望み、感謝して受け取る季節です。どうぞ皆さまに神さまの祝福がありますように。

もう 30 年も前になるのでしょうか。細かいところは思い出されませんが、でもその印象ははっきりと憶えています。夕方の県内ニュースでもその準備と到着が何度も取り上げられていました。まさに市を挙げての一大プロジェクトといったものでした。「仙台港に、支倉常長が乗った船の復元船がやってくる」のでした。支倉常長、誰のことだろう。ニュースは小学生にもわかりやすいように何度も解説をしてくれました。400 年前に、伊達政宗の命を受けて欧州に向かった家臣がいること。大変な苦勞をしながら欧州にたどり着き、なんとか「使命」を果たそうとしたこと。加えて日本に帰るためになお苦勞を重ね、ついに帰国しても「使命」が果たせなかったこと。その 400 年の記念で、復元船が作られ、しかもそれが仙台港に来るといいます。今振り返れば、それまでの幼い私には、信長や秀吉の歴史は聞いたことがあっても「東北」が主人公として語られることが、なかったのです。それは、子ども心に「歴史」を、しかも「東北の歴史」を肌で感じさせるはじめての出来事でした。

ニュースを見ていた父が私に話しかけました。「誰でも見学できるのか。見に行くか」。私は一も二もなく行くことにしました。

仙台港に係留された復元船には、私と同じような小学生が集まっていました。船の大きさは外から見ると「中くらい」の印象でした。揺れるタラップを渡って甲板に上がります。潮のにおいに混じって木の香りがします。入口は船の真ん中のあたりだったのでしょうか。小学生の私が少しかがんで入るような、低めの天井の階段を下って船内に入ります。暗い、狭い……。高さは子どもにはかろうじて問題ありません。でも横幅は窮屈さを感じるものでした。「こんな船で海を渡れるのだろうか」。それが率直な印象でした。

でもだからこそ、子ども心に感じた驚きは鮮烈でした。「この船で彼らは、ヨーロッパまで渡ったのだ！」太平洋の大きさ、遠さを知らない小学生です。大洋の広さを今にして考えるとき、この時の感慨は一層の切迫感を感じます。彼らが抱いていた「使命」とは何だったのでしょうか。彼らは何を欲していたのでしょうか。そしてそれは、わたしたちの街と何かが繋がっているのです。そんな印象が小学生だったわたしにも強く迫ってきたのでした。今でも忘れられない一日なのでした。

在りし日の印象と体験は、わたしを歴史という大きなつながりへと加えて導いてくれるものでした。目いっぱい出来事に会い、批判的な視野をも含んでそれらと向き合っ、なお祈りと共に憶えていく。信仰の思いに支えられて、希望を語りなおしていく。東日本大震災も、熊本も、能登も、各地の地震被災地や災害・紛争被災地も、そんな風に互いの被災地とそこでの出来事に会うものでありたいと改めて願います。今回のニュースレターが、皆さまを改めてそんな大きなつながりへと繋ぐ、きっかけの一つとなれば幸いです。

クリスマスの祝福が皆さまに豊かにありますように。

東北ヘルプ理事 阿部頌栄
日本ナザレン教団 仙台富沢教会 牧師